札幌市小学校のスキー学習の環境改善

～将来のスノースポーツ増加を目指して～

札幌大学　東原ゼミ B 班

〇松本　雄也　　江口　剛　　林　未来　　田村　風桂

1. 緒言

今日、スノースポーツ施設はその環境に恵まれている。しかし、札幌市ではスノースポーツ離れが進み、問題となっている現状がある。何故、施設環境は拡充されて来たのにも関わらず、スノースポーツ離れが進んでいるのか。このままでは、札幌市民は家に引きこもりがちになり、冬季は運動不足になってしまう。また、整備されてきた施設の運営や維持管理も観光客に頼った不安定なものになってしまうだろう。

そこで、若者をターゲットにスノースポーツに興味や関心を持ってもらい、札幌市特有の文化守るとともに、それを継承し、将来のスノースポーツ人口の増加を目指す。

2. 研究目的

札幌市小学校のスキー学習の問題点とスキー学習が将来的にスノースポーツをすることに繋がっているのか明らかにし、札幌市に対して小学校スキー学習の環境改善案を提言することを研究目的とする。

3. 研究方法

(1) 札幌市のスノースポーツ離れの動向について文献やアンケート調査。

(2) 札幌市小学校のスキー学習に関する問題点を現場の教員へのインタビュー調査。

(3) 海外やその他の降雪地域におけるスキー学習プログラムに関する情報の収集。

4. 研究結果

(1) 札幌市のスノースポーツ離れの動向

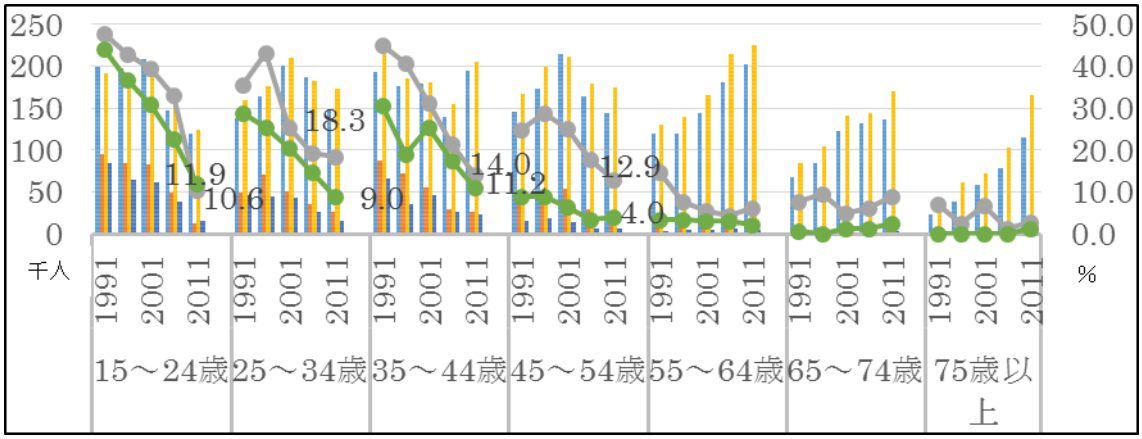

図 1：札幌市スノースポーツの人口動向

図 1 には性・年代別スノースポーツの実施率の経年推移をしめした。このグラフから読み取られることは、どの年代もスノースポーツ人口は減少していて、特に 15～24 歳の若者がスノースポーツをしなくなっているということである。

(2) スキー学習に関するアンケート調査結果

図 2 は小学校スキー学習の感想の比率を示した。スキー学習に対しては楽しかったという感想は、55%とほぼ半数だが、個人でスノースポーツをしている人は 119 人中、昨シーズンは 25 人、一昨シーズン 21 人、二昨シーズンは 28 人とスノースポーツをあまり行っていないという結果である。

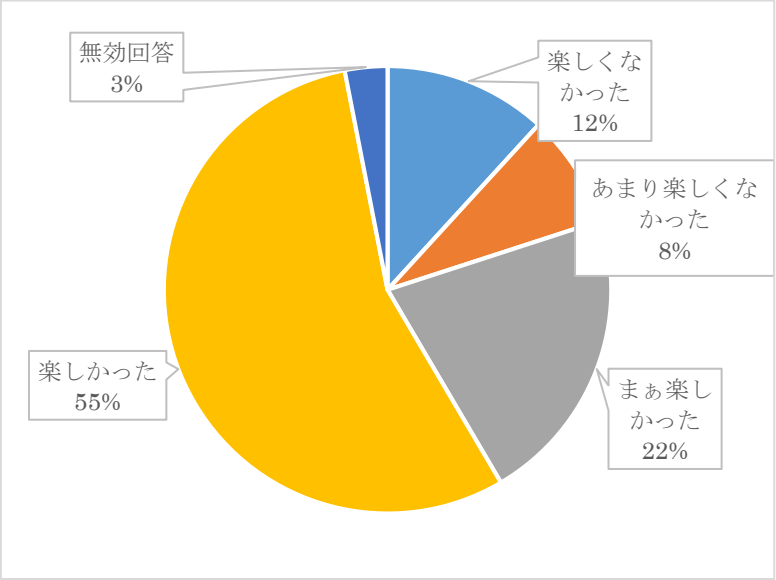

図 2：スキー学習の感想

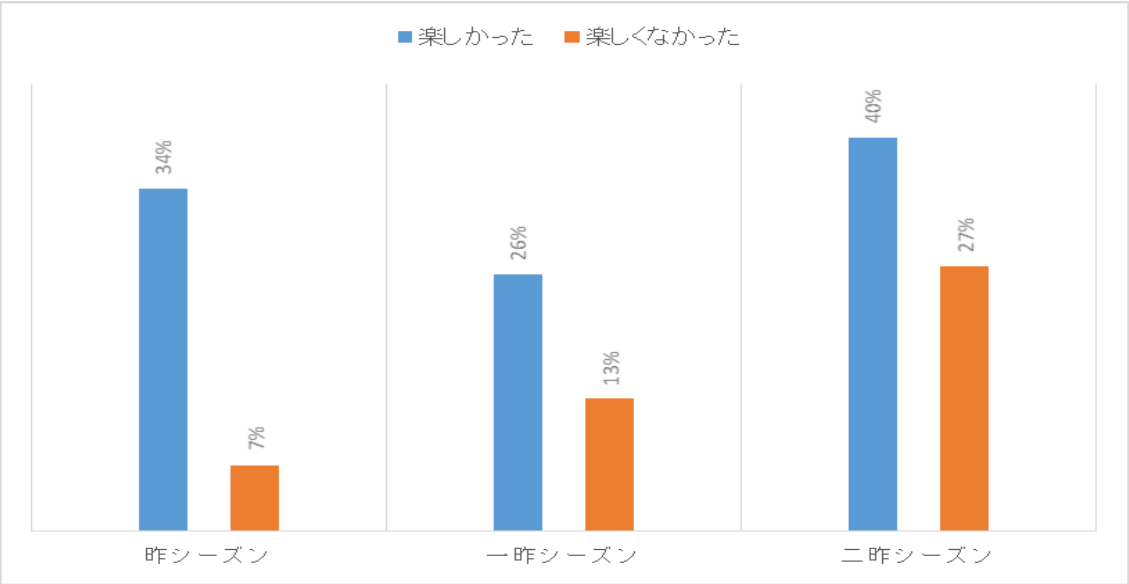

図 3：感想別スキー場利用率

図 3 は感想別に楽しかったか・楽しくなかったで、個人的にスキー場に訪れているのかを示した、楽しかった感想の人は、昨シーズン 34%、一昨シーズン 26%、二昨シーズン 40%に対し、楽しくなかったは、昨シーズン 7 %、一昨シーズン 13%、二昨シーズンは 27%とやはり、スキー学習を楽しくないと感じている人は個人でスキー場に行かない傾向

にある。

表１：スノースポーツをやらない理由

	項目	ポイント
1位	お金がかかる	7.87
2位	道具がない	7.41
3位	他のことで忙しい	6.30
4位	苦手意識がある	6.20
5位	車がない	5.97
6位	家族がやらない	5.19
7位	楽しくない	5.04
8位	雪が嫌い	4.53
9位	一緒に行く人がいない	4.06
10位	その他	3.96

表１は個人的にスノースポーツをしない理由として、上げられた理由をランキング順に示した。

これらは、札幌では対策を行っており、雪マジやレンタル代の値引きを行い、交通網も発達している。ではなぜこのような理由ができてしまうのであろう。それは、ゲレンデでのスノースポーツに固執した考えになってしまい、スノースポーツが手軽で楽しくできるものではないと思い込んでいるからではないのだろうか？

(3)インタビュー調査結果

ア.バスの手配問題

札幌幌南小学校の教員に５月の上旬にインタビュー調査を行いスキー学習での問題点の現状を明確にした、その結果、各小学校がバス会社へバスの手配を行っているが冬場はウィンターイベントが盛んな札幌では観光客が多くなるので、バス会社は観光客を優先してしまい、バスの確保が困難である。

表２は各スキー場を利用している学級の総数と１日に訪れる数を示した、２月前半の札幌市は、観光客の多い時期でバスの手配が難しい。そのことから２月後半にスキー学習が集中するので、約 16 日間でスキー学習をすると考えたら、１日に必要なバスの台数は１学級１台と考え、合計で約 59 台ものバスが必要とされるが、観光客が多い札幌市ではこのバスの台数の確保は困難である。

表２：スキー場の利用学級数

	スキー場を利用している学級数	1日にスキー場に訪れる学級数
ダイナスティー	191	20
バンケイ	221	17
滝野	128	12
Fn. S	74	7
ホワイトパーク	13	3
その他	138	0
合計	765	59

イ.指導者不足の問題

スノースポーツ離れによりスキー人口も減っている中、スキーを指導者も少なくなっている。小学校教員のなかにもスキーが出来ない人が多く、教員１人あたりに約 30～50 名近くの児童を指導しなくてはならないので、とても厳しい現状である。

5.政策提言

ア. 「スキーの国」のスキープログラムの振興を推奨する

ゲレンデでのスキー学習の実施率は、小学校では100%で良く思われるが、ゲレンデのスキー学習の固執した実施により、バスの手配問題、指導者の不足などの問題が出てきてしまうのではないか。そこでフィンランドで行われているスキー学習プログラム「ヒーヒトマ」をベースに、速水修(北海道教育大学旭川校名誉教授)が考案した「スキーの国」を多くの小学校のグラウンドや公園で実施すれば、必要なバスの台数は減り、スキー指導ができない教員や保護者でもサポートすることができる。

イ．バスの手配を教育委員会に統括させる

教育委員会は各小学校のスキー学習の日程や参加学級数等のデータを管理し。そして、統括に当たる職員を新規雇用することで、各学校で手配してきた、バスの手配問題をスムーズに行えるようにする。

そして、この２つの提言を組み合わせることで、バスの手配問題・指導者問題を改善することができる。

6.まとめ

小学校のスキー学習は身近なスノースポーツである。ここでスノースポーツの楽しさを伝えるには、ゲレンデでのスキー学習だけではなく、グラウンドでの楽しいスキー学習導入することだと考える。スノースポーツの視野を広げ、ゲレンデでの固執した考えからくる問題点を改善し、もっと楽しく手軽にスキー学習を実施することでスノースポーツ人口の増加につながると期待する。

7.参考引用文献

速水修(2007)　スキー遊びとスキースキル＜http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/＞
札幌市教育研究推進事業小学校保健体育研究スキー専門(2013年)　スキー学習の手引き